

<サロン9条> 第342回例会 (2019.11.26)

テーマ 「チャイルドラインの活動に加わって」

話題提供 : 岡 和代さん (チャイルドラインぎふ理事長) 参加者 13名

いじめ、不登校、虐待など子どもを取り巻く状況は悪化の一途をたどっています。生きにくさに苦しむ子どもたちに向き合い、耳を傾け続けているチャイルドラインの活動を通して子どもたちの現状を話して頂き、共に考えました。

『チャイルドライン』は、18歳までの子どもがかける『子ども専用電話』です。1986年にイギリスで始まり、現在では145ヵ国で、192のチャイルドヘルプラインが活動しています。日本では、いじめの問題が深刻化していた1998年、日本初のチャイルドラインが立ち上げられました。今では40都道府県で70団体が活動しています。チャイルドラインでは、子どもたちに安心して電話をかけてもらうため、「ヒミツはまもるよ」「どんなこともいっしょに考える」「名まえは言わなくてもいい」「切りたいときは電話を切っていい」の4つの約束を書いたカードを県内の小中学校などを通して配布しています。

チャイルドラインは、電話相談ではありません。電話の受け手に子どもたちが自分の状況を話すことで、自分を考える機会にすることが目的です。子どもたちは自分の思いや抱えている問題を聞いてもらうことで心が軽くなったり、混乱した気持ちを整理したりします。話を聞いてもらうだけで「受け止めてもらえた」と感じて気持ちを落ち着かせます。「自分を受け止めてくれる人がいると子どもたちに伝えたい」——チャイルドラインは子どもたちにとって声でつながる「こころの居場所」なのです。

相談活動ではないので、受け手から答えを言ったり誘導したりしない・・・子どもが電話の向こうで沈黙していても決して話すのを促したりはしない——子どもたちが安心して話せる受け手になるために、たゆまぬ研修と、毎日の振り返り活動があります。

岡さんの話から、子どもたちが置かれた厳しい状況が見えてきました。塾・習い事に追われる子ども、スマホの「ライン」に縛られ、家に帰ってもホッとできない子ども、仕事に疲れて子どもの話を聞けない親。男子に多い性の悩み、「死にたい」の電話も・・・受け手は、ひたすら聞きます。

子どもたちからの感想も紹介されました。「一緒に真剣に悩みを聞いてくれてすごく力になった。途中で感情的になって泣いちゃっても『ゆっくりでいいよ』って言ってくれて嬉しかった。何度でもどんな悩みでも聞いてくれるから安心できる。名前をきかれないところもとってもいい。」(13歳女) など。

参加者からたくさん質問、意見がありました。以下、その一部の紹介です。

・はじめてこういう活動があることを知った。電話の受け手の確保のための努力は？

⇒養成講座が行われている。特別な資格もいらぬ。しかし、講座の中で深刻な電話の内容などを知り、途中で去る人もいる。

・電話を受けて、その内容の重さにストレスを感じたり、かけた言葉がこれでよかったのだ

ろうかと悩んでしまうことはないか？

⇒悩んでしまうことはある。毎日、活動後に振り返りをして、互いの悩みをスタッフで共有するようにしている。

・受け手としての苦勞は？

⇒言葉のキャッチボールのちょっとしたニュアンスが大切。ある言葉で子どもがすくっと前を向くのを感じることもある。

・電話で子どもが「死にたい」と言ったらどう受けるのか？

⇒この電話をしている間は死んでいないのだから、悩み話を聴く時間をできるだけ長くするようにしている。

・最近、「子どもは無理をして学校へ行かなくてもいい」という風潮があるが、それはどうかと思うのだが。

⇒子どもは「学校へ行かなくていい」とは思っていない。多くの子どもは、「学校へ行けない自分は最低！」と思っている。

・どのようにチャイルドラインの存在を知らせるようにしているのか？ 私は地域の一住民として、学校にチャイルドラインのカードを配って知らせてくれるよう要望したい。

⇒カードを持っている子は少ない。新聞で呼びかけても、新聞読者は少ない。何らかの受け皿は多い方がいいので、多くの子に目に触れるように工夫したい。

最後に、「自分の思いを言葉に変えることはとても難しい。さらに、人に伝わるように言ったり書いたりする訓練——このプロセスは長い。今日知ることができた活動は、こうしたプロセスの始めの段階で、自分の気持ちを表現できない子どもたちへのとても大切な援助だと思いました」、という司会者によるまとめがありました。